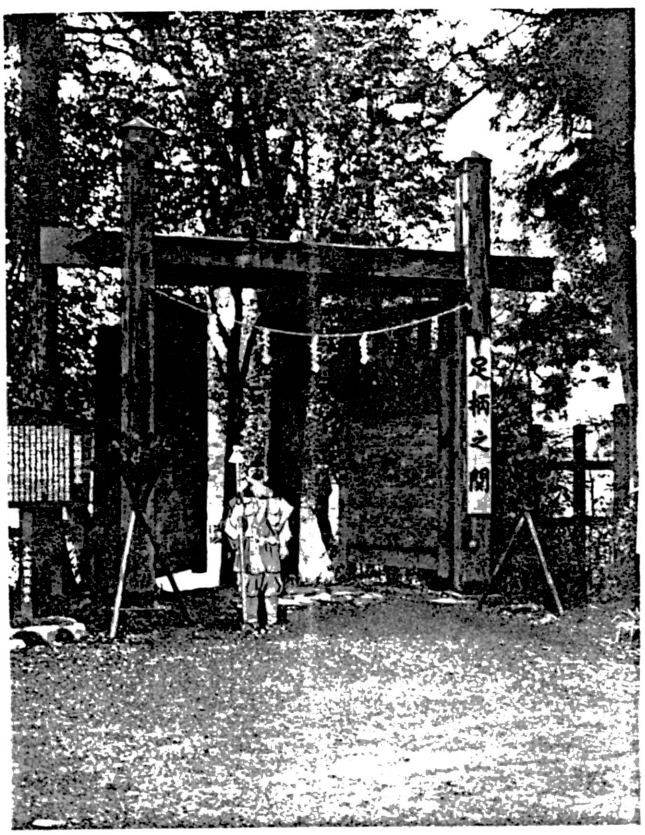
南足柄路の文化財を
をたずねて



鵠沼　第５３号

１９９０年　５月　８日

鵠沼を語る会

大雄山道了尊

十国峠
箱根町
元箱根
駒ヶ岳
神山
金時山
明神ヶ岳
一、三五五米
双子山
小涌谷
上強羅
大涌谷
湖尻
強羅
宮城野
明星ヶ岳
箱根登山電車
箱根バス
熱海
湯本
早川
小田原城
小田原
緑町
井細田
五百羅漢
五百羅漢
穴部
飯田
相模沼田
岩原
塚原
和田河原
富士フイルム
大雄山駅
酒匂川
相模川
至東京
至新宿
飯泉観音
相模湾
大雄山
丹澤山塊
奥ノ院
御真殿
道了大尊
不動堂
不動滝
結界門
水屋
本堂
開山堂
金剛水堂
宝蔵
大書院
浴室
僧堂
御供橋
大慈院
手洗所
檀現水
岩落門
尚宝殿
瑠璃門
総受付
待鳳閣
香積台
庫裡
大宮橋
道了山駅
座禪石
清左衛門地蔵
極楽寺
相生松
正善尼
仁王門
風雲観音
法華閣
開山

大雄山最乗寺略縁起

一、はじめに

大雄山最乗寺は神奈川県南足柄市にあって曹洞宗に属し、門葉あわせて四千余の末寺をもつ大寺で、御本尊に釈迦牟尼佛を奉安、日夜鎮護国家を祈り、真人育成の道場として精進をつづける六百年来の巨刹であります。

境内山林あわせて百参拾町歩、老杉生い茂り霊気満山に漲りひとたび登嶺するもの、ことごとく霊気を感ずる霊境で堂塔は三十余棟に及んでいます。

二、開山の由来

大雄山最乗寺は應永元年（一三九四）了庵慧明禅師が開かれたもので、お生れは相模国大住郡糟谷の庄(現在、伊勢原市）藤原姓であります。はじめ鎌倉の不聞禅師について出家、のち総持寺峩山禅師に参じ、更に丹波（兵庫県三田市）永沢寺通幻禅師の大法を相続されました。

永沢寺、近江総寧寺、越前龍泉寺、能登妙高庵等をそれ〴〵通幻禅師のあとをうけて住持し詔を奉じて大本山総持寺に輪住されましたが五十なかばにして退去し郷里の相州に竺土庵を結びました明徳年間のことであります。

ある日一羽の大鷲が禅師の袈裟をつかんで足柄の山中に飛び去り大松の枝にかけるの奇瑞を示しました。その啓示により禅師はこの山中に梵刹を創立されたものであります。

三、守護道了尊について

大雄山最乗寺の守護、妙覚道了大薩埵は修験道における満位の行者、相模房道了尊者として世に知られたお方でありました。

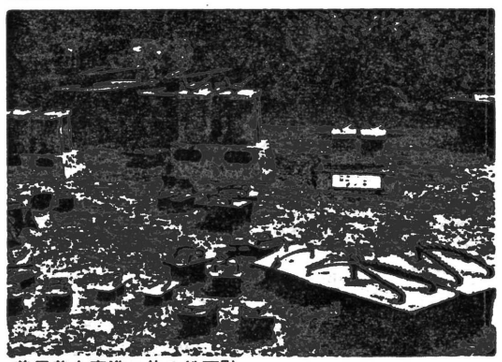
ときに、聖護院門跡覚増法親王につかえ、種々の霊験あり、大和の金峰山、熊野三山、奈良大峰等にご修行になりましたが了庵慧明禅師、明徳年間に大雄山最乗寺を創建さるゝを覚り三井寺勧学院から飛来して土木の工事を担当し約一年にしてこの大業をなしとげられたのでありますが、この力量一人にして五百人の働きありとされております。開山禅師は十八年間、当山を離れず学人の接化に当られたが修行僧は常に数百人をかぞえ、その業を扶けて弁道され衣食の道を開いた監司道了尊者のはたらきは超人的なもので、いかに強大な霊力のもちぬしであられたか機械文明の現代から推察して容易に知ることができません。

應永十八年三月二十七日おん年七十五才で開山禅師はご遷化になりました。

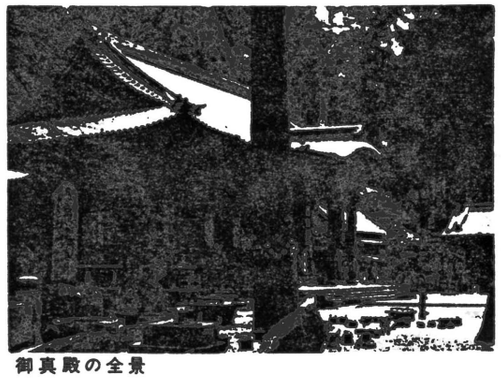
「すでに禅師のご遷化により私のこの世においてのつとめも終った、以後当山中にあって大雄山を守り諸人を利済すべし」と五大誓願文を唱えて山中奥深くその身をかくされたのであります。

その時のお姿が威烈、厳として火焔を背負い右手に利剣を左手に綱をにぎり、しかも白狐の背におたちになったもので衆人悉く奇異の感にうたれ恐惶合掌するうちに天地鳴動してかきけすが如く全身をかくされたのであります。

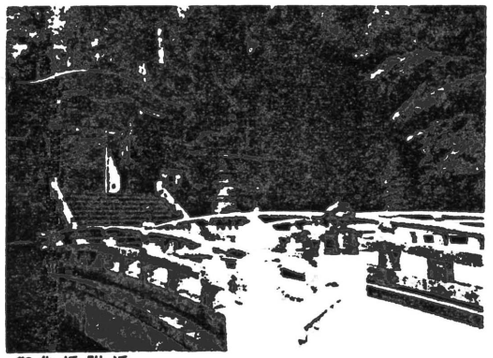
以後、諸願成就の道了大権現と称し明治以後、道了大薩埵と称し奉り願人多数の熱烈な尊崇をあつめていますが大薩埵は十一面観世音菩薩の御化身であられたものて奥の院に本地佛、十一面観世音を奉祠しているのであります。



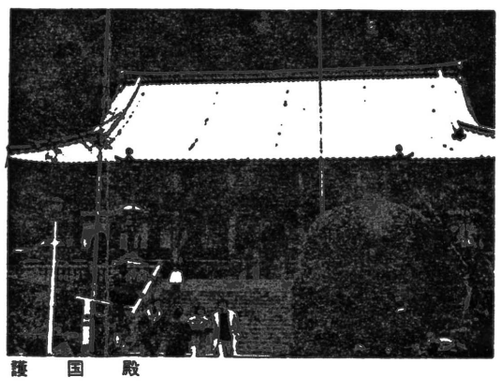
善男善女寄進に依る鉄下駄



御真殿の全景



御供橋附近



護国殿

年中行事

新年祈禱	1月1日　2日　3日
大　祭	1月　5月　9月の27日　28日
小　祭	毎月27日　28日
豆撒祭	2月節分の日
夏山祭	7月15日――8月15日
鎮火祭	11月27日

尚参禅修養等の会が定期に催されております

参拝順路

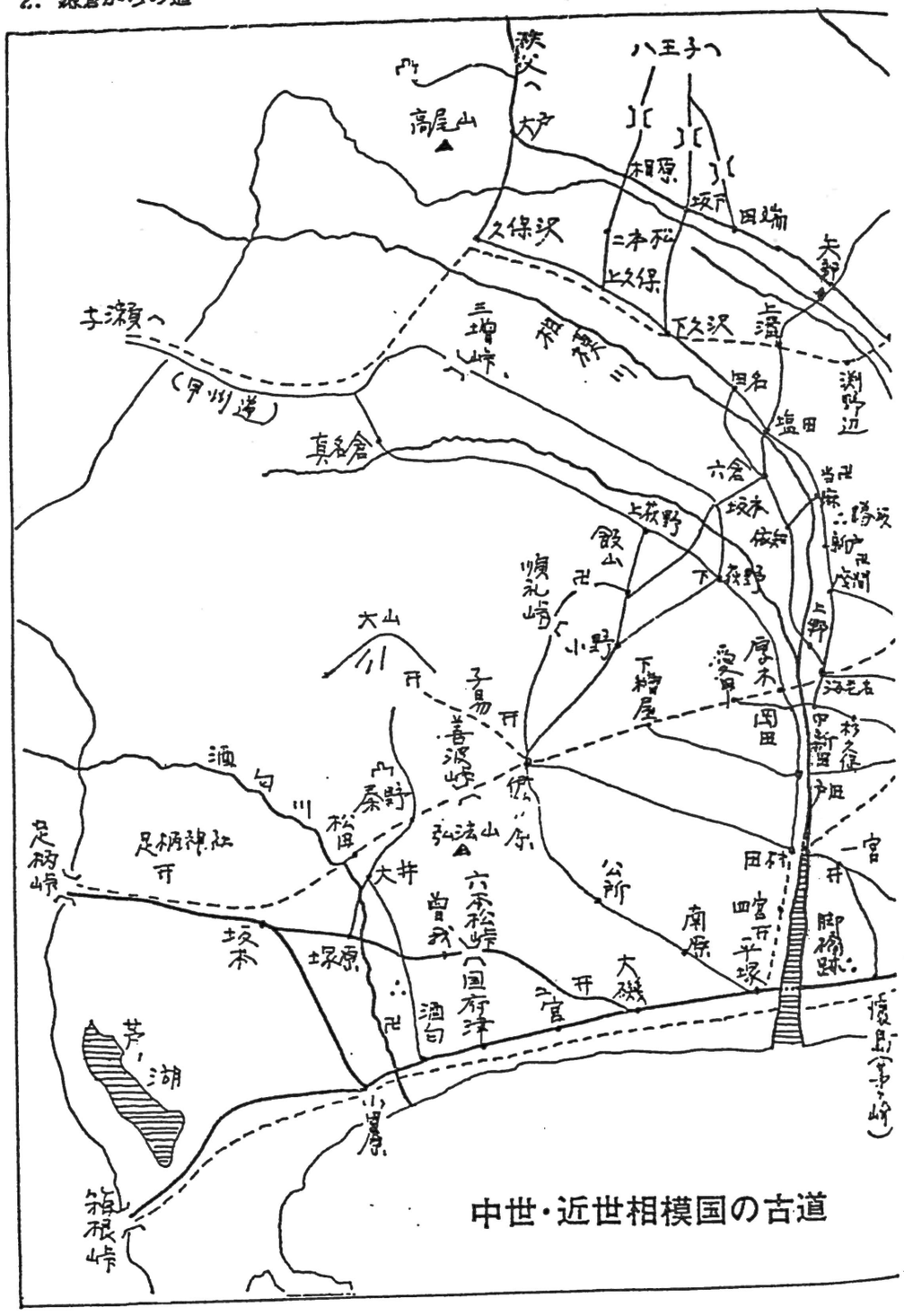
(1) 東海道線小田原駅より私鉄大雄山線へ乗換(所要時分20分)終点大雄山駅下車　それより御山まで乗合バス(10分)の便があります。

(2) 小田急線新松田駅又は御殿場線松田駅下車バス(30分)の便があります。

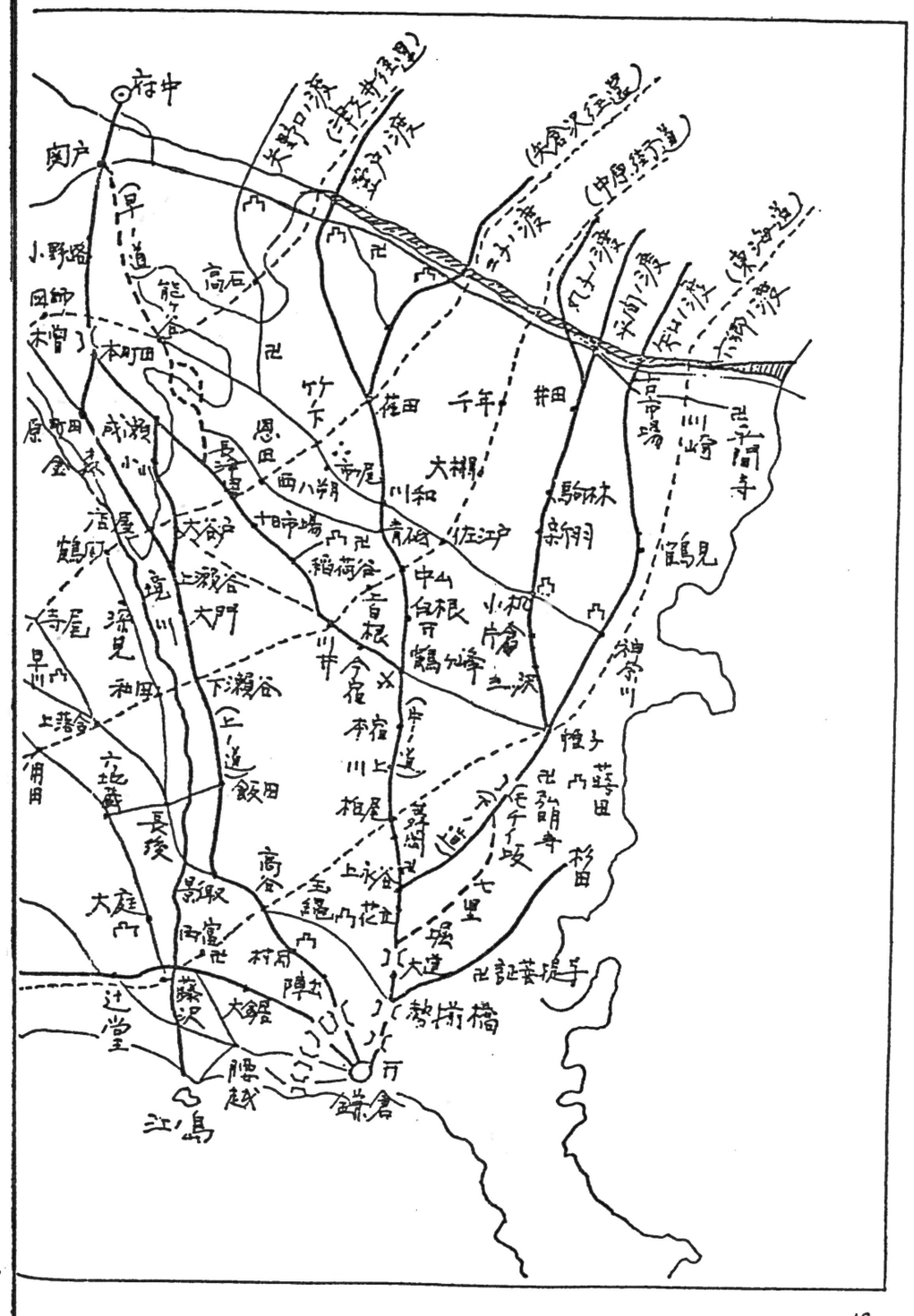
神奈川県南足柄市大雄町
大雄山最乗寺
電話　〇四六五(74)三一二一～三番

箱根強羅早雲山
大雄山箱根別院
電話　箱根〇四六〇(2)一一八一　一一八二番

東京都文京区白山五・三二―九
大雄山東京別院
電話　(03)(八一一)一七四四番


八王子へ
高尾山
相原
坂戸
田端
久保沢
二本松
上久保
下久沢
上溝
矢部
三増峠
相模川
寺尾へ
(甲州道)
真名
塩田
渕野辺
真名倉
六倉
坂本
当麻
上萩野
飯山
依知
下萩野
新戸
上鶴間
順礼峠
小野
大山
子易
善波峠
弘法山
下糟屋
厚木
岡田
上野
杉久保
一宮
秦野
松田
酒匂川
足柄神社
足柄峠
大井
六本松峠
曽我
公所
南原
平塚
四宮
脚柄坂
坂本
塚原
酒匂
国府津
大磯
芦ノ湖
小田原
箱根峠
懐島(第六峠)

中世・近世相模国の古道


府中
関戸
矢野口渡
(津久井往還)
宮戸ノ渡
(矢倉沢往還)
(中原街道)
二子ノ渡
丸子ノ渡
平間ノ渡
稲毛ノ渡
六郷ノ渡
(東海道)
早道
小野路
高石
能谷
岡部
木曽
本町田
原町田
成瀬
金森
小山
恩田
長津田
竹下
花田
千年
井田
新田
大棚
川和
駒林
新羽
鶴見
川崎
品川宿
六郷
新尾
西八朔
十日市場
稲荷谷
青葉
佐江戸
中山
白根
小机
片倉
鶴ヶ峰
三沢
神奈川
寺尾
早川
上瀬谷
大門
境川
深見
和田
下瀬谷
今宿
本宿
上川井
上落合
(上道)
飯田
相尾
鶴ヶ岡
(中道)
六地蔵
長坂
高倉
上永谷
毛ヶ坂
七里
蒔田
杉田
大庭
影取
西富
玉縄
花立
村岡
陣ヶ
大船
藤沢
大鋸
辻堂
隠越
江ノ島
鎌倉
(鎌倉街道)

世之人間愛切なる小生の家物を挺
供義濃國恵那郡岩村藩士
沼尾鋪迄指越福島郡司
方相達候通右者松茸なる
家身井野猪鹿等を毎回書
回報之旨被仰付候ものなり

寶暦七丁丑年二月吉日　戸田茂睡

福島郡司殿
五番中

女三人、内髪切壱人小女壱人、
乗物弐挺美濃国恵那郡岩村従松
平能登守殿江戸屋敷迄、指越申
され候。福島御関所相違無く御
通有可く候。右の者松平能登守
殿家来、井野猪右衛門と申者の母
同じく妻、同じく娘の由能登守
殿断に付てかくの如くに候也。

戸田禾女正 ㊞

宝暦六丙子年三月六日

福嶋御関所　御番中

（註）
① 現在の岐阜県恵那郡岩村
② 大垣藩主で手形発行権者の一人
③ 一七五六年

矢倉沢関所跡

一、南足柄市矢倉沢字関場（矢倉沢五〇八）
二、昭和四十八年一月二十二日　市指定

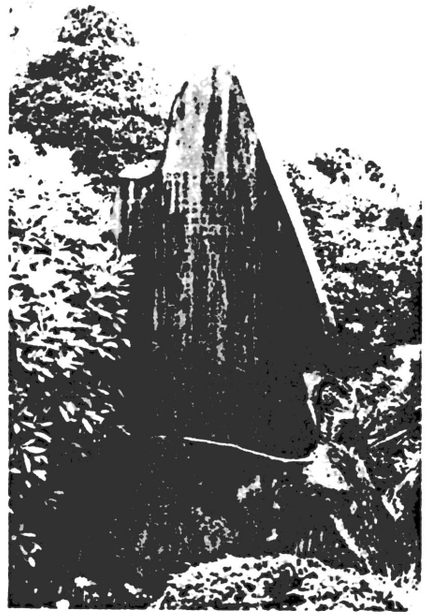
足柄峠を越える、むかしからの足柄道は、今から一〇〇〇年も前から大勢の人々に利用されていたが、昌泰二年（八九九年）に、傍馬党（しゆうまとう）という盗賊を取締るために、箱根の碓氷峠とともに、足柄峠に関所が設けられた。この時の関所は、平安時代の末期まで、その機能を果したと言われている。

その後、江戸時代に入り、箱根関所が東海道の表関所として完備されたのに対して、矢倉沢関所は、根府川・仙石原・川村・谷峨の他関所とともに、箱根関所の裏関所として設けられたものである。

その目的は、徳川家康が、小田原北条氏攻めの後、関八州を手に入れ、初めは、その領地を守る手だてとして関東の西方の守りのために設けたもので、征夷大将軍となり、江戸幕府を開いた後も、箱根関所同様に「入り鉄砲に出女」を厳しくとりしまる警察的なものであった。正徳元年（一七一一年）に出された高札が、最も代表的な「定書」であり、その中には、「出女」及び、「手負・死人」について特に厳しい取締りが伺える。

後に江戸が名実ともに日本の中心となると、矢倉沢往還（または矢倉沢街道）と呼ばれたこの関所を通る道は、商業交通路としての役割や、宗教的な　大山参り、富士参りの道として利用する人々の数が増えたため、さらに重要な取締りの場所となり、明治維新による廃止まで、この関所は続いた。

矢倉沢往還は、御殿場の小山方面より、足柄峠を越えてくると、地蔵堂を過ぎた所で二つに分かれ、一筋は関場を通り関本方面へ、他の一筋は本村を通り、山北から厚木方面へと通じている。このように二つの道筋があるため、どうしても通用門を二つ置く必要があり、一つを関場部落の中央に、他の一つは本村部落の西方に置いたが通行人は関場の方が多く、また宿屋等も置かれ、「現在でも、江戸屋・大和屋等、六軒程の屋号が残っている。）関場部落の方を矢倉沢表関所といい、本村部落の方を矢倉沢裏関所といった。



（矢倉沢表関所跡）

関所の構えは、記録によれば、総構え二〇間余り（約四〇m）で、全て小田原藩のあずかりで、運営されていた。関所番人は、番士㈠、常番人㈢、足軽㈡、中間㈠（貞享三年「御引渡記録」による）の八人が置かれ、箱根関所のような女改めの「人見女（ひとみおんな）」は置かれていなかったようである。矢倉沢関所の場合は、小田原領内の女は通行させたが、他領の女は通すことがなかったためと思われる。また、由井正雪事件の時のように、必要に応じて、加番といって、応援の番人が、派遣されたこともあった。

新編相模風土記稿によれば、大庭又五郎という人が、番人として初めてと言われているが、定かではない。江戸時代後半からは、代々、末光氏（矢倉沢五〇八）が、その役人をつとめた。末光という名字は珍しいが、四国に多いことから、大久保藩主が九州に行った時に、かかえられて来たのではないかと想像される。

現在、末光家には、門の礎石が残り、ここから、南西の方へ川を越えて柵がつくられ、北方の方は本村まで柵が続き（約一三〇m）、そこに裏関所の門が設けられていた。一方を狩川の谷、一方を山とにはさまれ、関本方面より登ってくる人々がよく見渡せた。この自然の要地に関所が築かれたことがよくうなずける。

関所の通行にあたっては、往来（通行）手形を必要とし、武士は藩の重役が、農民や町人には名主や家主や住職等が証文を書き、署名捺印したものを関所の役人の前に差し出さねばならなかった。飯沢地区有文書にある関所手形には次のように書かれてある。

ここでさらに関所通行について触れておくと、往来手形は、諸国御関所宛なので、この手形があれば、どの関所も通れそうなものだが、箱根関所のように、幕府の重要な関所は往来手形の他に、箱根関所宛の関所手形がなければ通れなかった。また京都の方に向かう上りには厳しく取り調べたが、江戸に下る時には手形がなくても通れた。おそらくこのことによって人口の流出を防ぎ、逆に多くの人々を江戸に引き寄せようとしたものと思われる。

明け六つ（午前六時）から、暮れ六つ（午後六時）が通用門の開く時間で、その時間以外に、または、通行手形なしに通過しようとするものは、関所破りの罪としてはりつけの刑に処せられた。（関所近くに、はりつけ場という地名も残されている。）

多い時には、一日数十名の旅人を調べたそうだが、旅芸人や相撲取り、絵かき等は、芸を見せたり、相撲のシコをふんだり、絵をかいて見せたりすることで、通行手形なしに通れることもあった。あまり事件の少ない山の中の役人達にとっては、ただ見張るのが仕事だったため、芸人達の芸は、数少ない楽しみだったようである。

尚、現在、末光家には、門の礎石、数枚の通行手形、部落年貢割付表などが所蔵されている。日本刀・脇息・役人の関所日記などもあったそうだが、それらは火災により消失してしまい残念なことである。

関所を通るには、村の名主が出した関所手形を見せることになっていました。飯沢区有文書にある関所手形には次のように書かれています。

往来証文之事（おうらいしょうもんのこと）

一、比奥右エ門と申す者代々禅宗狩野村極楽寺且那にて当村小百姓に御座候処　比度秩父順礼に罷出申候国々所々御関所無相違御通被遊司被下候且又向方にても相願候　何様之儀出来候共其御所之御役人中絣に御宿之御憐愍を以御介抱奉願入候　勿論且那寺より證文被差出候通萬一病死仕候ハバ是亦其御所之御作法に御取置可被下候比方江及御届不申候為其往来證又如件

相模国足柄上郡飯澤村　　名主　繁太郎
宝暦拾弐年壬午二月　　組頭　市左エ門
　　源左エ門
国々所々御関所　　百姓代　太兵エ
御番人衆中様
国々御村々
御名主　御組頭衆中

（飯沢地区所有の関所手形を写す）

参考文献

●史談足柄十五巻　足柄史談会
●南足柄町文化財調査報告書第一　同委員会
●箱根関所物語　加藤一　奈川新聞社
●かながわの古道　上著

（富岡　洋文）

矢倉沢裏関所跡

一、南足柄市矢倉沢字本村　（矢倉沢一五三五）
二、昭和四十八年三月二十七日　市指定

（矢倉沢裏関所跡）

矢倉沢表関所の説明で述べられているように、矢倉沢往還（街道）は、御殿場から足柄峠を越え、地蔵堂・矢倉沢関場・関本・松田・泰野・厚木と通って江戸を結ぶ道筋と、地蔵堂より、矢倉沢本村を通り、内山・平山・山北・松田・厚木と通じる二つの道筋に分かれており、後者道筋の矢倉沢本村の西の端に、矢倉沢表関所の裏番所として置かれたのがこの関所である。この関所も表関所同様に、江戸時代を通じて、矢倉往還の旅人の取り調べを行った。

現在の石村豊氏の宅地全部が、当時の関所関係の跡地で、石村家が代々関所の番頭をつとめ、表関所と連絡をとりながらその番にあたっていた。

史談足柄に、「矢倉沢裏関所にまつわる昔話」として石村豊氏がいくつかの昔話を印しているが、その一例を紹介すれば、本村地区には農家や、炭焼きをしているものが多く、関所を通ってその先で仕事をしている者も多数あった。関所は当然、村の者の日常生活においても、不都合きわまりないものであったと想像されるが、しかし門の裏の方に三尺程の通路があり、それは通称「犬くぐり」と呼ばれ、犬は手形がなくても関所破りの罪にはならないということで村の人は手形がなくとも、その犬くぐりを通過することができた。

大きな荷物を持って夜遅く通ることはできなかったので、荷物はそこにおいて明朝とりに行ったり、暗い中を通る時は必ず声をかけ、村の者であることを明らかにした。この関所は通行人を調べる所で、村の者が仕事に出るには不自由でなかったと記されている。

尚、同家には当時の遺物として、門柱礎石三個、手あぶり用の陶製火鉢二個、旅人接待用朱塗盆一枚、江戸時代中期の雛人形台とも六個、根府川関所の手形他の古文書等が保存されている。

参考文献

史談足柄十六巻　足柄史談会

（富岡　洋文）

足柄の　彼面此面に　刺す罠の
　かなる間しづみ　児ろ吾紐解く
（巻十四の三三六一）

（大意）足柄山のあちらこちらに罠をかけて、しばらくの間、静かになる。そのような静かな時に、彼女と私は紐解いて寝たことである。

わが背子を　大和へ遣りて　まつしたす
　足柄山の　杉の木の間か
（巻十四の三三六三）

（大意）夫を大和へ送り出してしまった私は足柄山の杉の木の間に立って待っていることだ。いったい、いつまで待ったら帰って来てくれるのだろうか。

足柄の　箱根の山に　粟蒔きて
　実とはなれるを　逢わなくもあやし
（巻十四の三三六四）

（大意）足柄の箱根の山に、粟をまいて実ったように、私の恋は成就したのに、今日逢えないのは、おかしいことだ。

足柄の　土肥の河内に　出ずる湯の
　世にもたよらに　児ろが言はなくに
（巻十四の三三六八）

（大意）足柄の土肥の河内にわき出る湯のように、二人の仲が絶えるようにはあの子は言わないけれども……心配でならない。

足柄の　崖の小菅の　菅枕
　何故か巻かさむ　児ろせ手枕
（巻十四の三三六九）

（大意）足柄の崖に生えた小菅で作った菅枕を、なぜしているのですか、菅枕よりも私の手枕にしなさいよ。

足柄の　箱根の嶺ろの　和草の
　花つ妻なれや　紐解かず寝む
（巻十四の三三七〇）

（大意）足柄の箱根の嶺に生えている柔らかい草が、花だけで実のならないように、実をむすばない妻であろうか。それなら紐をとかないで寝ることになるが、そんなはずはない。

足柄の　御坂畏み　曇夜の
　吾が下延へを　言出つるかも
（巻十四の三三七一）

（大意）足柄の坂の神が恐ろしいので、曇夜のように絶対かくして、口外しないで包んでおいたけれど、ついに言ってしまったことよ。

足柄の　安伎奈の山に　引く船の
　後引かしもよ　ここば来がたに
（巻十四の三四三一）

（大意）足柄の安伎奈の山（明神ヶ岳か）で、舟を後から引いて下ろしていくように、帰る夫の後を私は引っぱりたい。私のところへ来るのがひどく難しいのだから。

足柄の　吾を可鶏山の　穀の木の
　吾をかずさねも　穀割かずども
（巻十四の三四三二）

（大意）足柄のわをかけ山（矢倉岳か）の穀の木ではないが、わたしを誘って下さいな、穀の木を割かないでも。

足柄の　御坂たまはり　顧みず
　吾は越え行く　荒し男も　立しや憚る
　不破の関　越えて吾は行く……
（巻二十の四三七二）

（大意）足柄の坂を通していただいて、私は後をふり返らず越えていく。猛き男子も立ち止り、行くのをはばかる関も、私は越えて行く。

ちはやぶる　神の御坂に　幣奉り
　斎ふ命は　母父が為
（巻二十の四四〇二）

（大意）恐ろしい神の御坂に幣をまつって、わが命の無事を祈るのも、母父のためである。

わが行きの　息衝くしかば
　足柄の峰延ほ雲を見ごと　偲はね
（巻二十の四四二一）

（大意）私の旅が嘆かれるときは、足柄の山にはふ雲を見ながら、私を偲んでおくれ。

足柄の　御坂に立して　袖振らば
　家なる妹は　清に見もかも
（巻二十の四四二三）

（大意）足柄山の坂に立って、袖を振ったなら、家にいる妻は、それとはっきり見るだろうか。

色深く　背なが衣は　染めましを
　御坂たばらば　ま清かに見む
（巻二十の四四二四）

（大意）色濃く夫の衣は染めるのだったのに、足柄山の坂をお通りになったら、はっきり見えるだろうに。

足柄の　八重山越えて　いましなば
　誰をか君と見つつ　偲はむ
（巻二十の四四四〇）

（大意）足柄の山の幾重にも重なった山々を越えて、お出でになりましたら、誰をあなたと見て、お慕いいたしましょう。

万葉集

万葉集は、奈良時代（今から約一、二五〇年前）にまとめられた我が国最古の歌集です。

全二十巻に収められている四千五百余首におよぶ歌の制作年代は、古くは仁徳天皇の時代から、近くは八世紀半ばに至る約四百年間にわたります。

万葉集という名は、「万の言の葉」というところから、「万にわたる多くの歌を載せた集」と解釈する説がありますが、一方、「万世」という意味にとり、「多くの時代にわたる集であり、万代の後までも伝えるべき大切な歌集である」と解釈する説もあります。

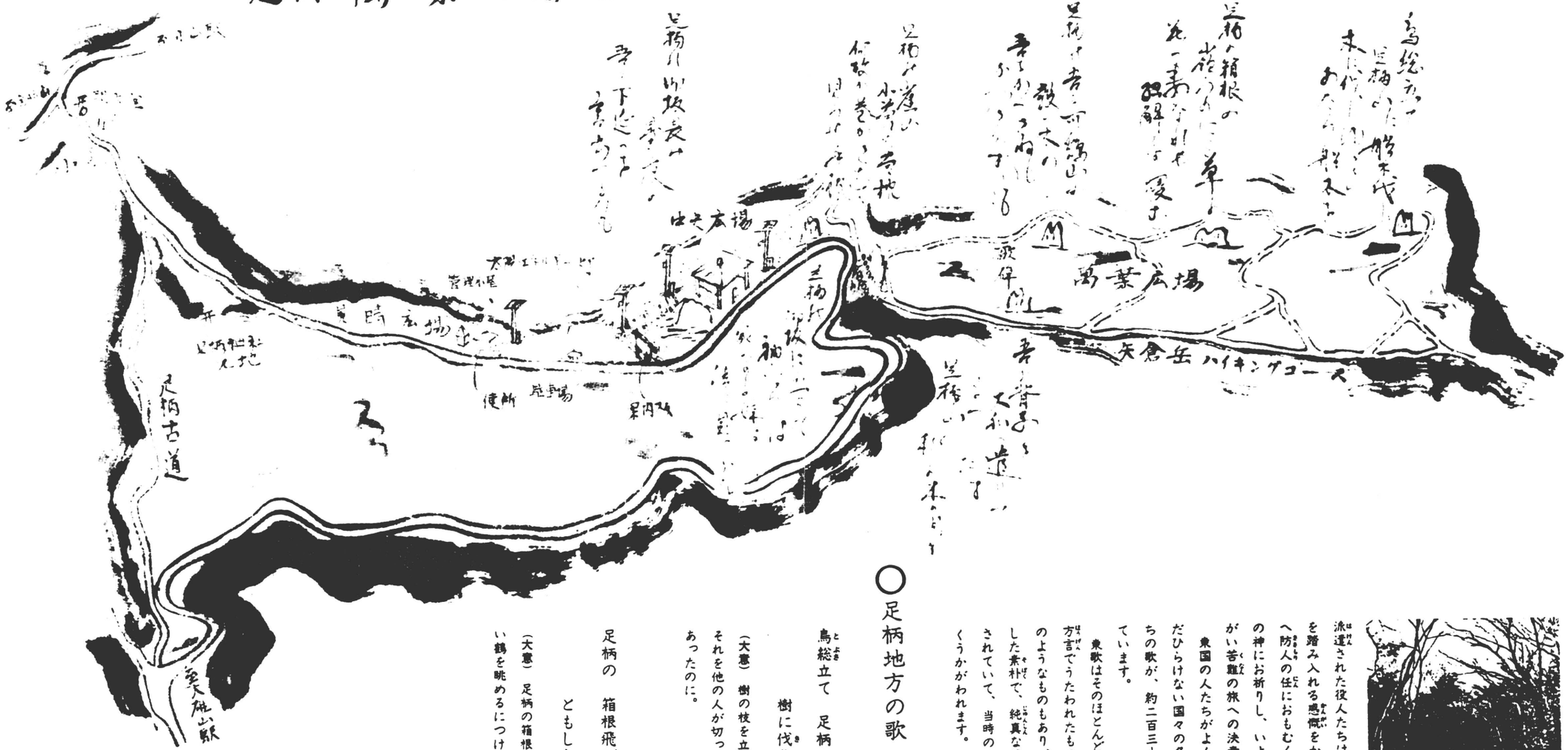
万葉集の編さんは、ただひとりの手によったものではなく、長い年月をへて、多くの人々の手が加わってまとめられたものです。そして、奈良朝の終り頃、つまり八世紀末に、大伴家持が自分の手もとにあった歌も加えて全二十巻に仕上げたと言われています。

その頃は、まだかな文字のなかった時代ですから、みな漢字の音や訓をあてて、書き表わしています。これを万葉仮名といっております。

歌の種類は、長歌（五、七音を何回かくり返し最後を五、七、七音で結ぶ）が約二百六十首、短歌（五、七、五、七、七音の形式）が約四千二百首、そして施頭歌（五、七、七音）が約六十首ありますが、その内容はいろいろあって、まず、天皇や貴族の遊楽や行幸、狩りや旅、また、四季おりおりによんだ歌、愛の心をよみ合ったものなどがあります。庶民の歌では、親子、兄弟や友だちとのやりとりをした歌、死の悲しみをうたった「挽歌」などがあります。その他、東国の民謡風な素朴な東歌や、九州の守備兵の防人の歌などもあります。

このように、作者は天皇、貴族から民衆にいたるまで幅が広く、また、地理的にみても日本全国すべてにわたっているところから、万葉集は、まさに上代日本民族の大合唱といえることができるでしょう。

足柄 萬葉公園 図



○足柄と東歌

その頃の都、奈良から東にあたる関東や東北地方は、東国と呼ばれていました。

そして、当時の足柄道は、その都と東国とを結ぶ重要な道でありました。都から地方へ派遣された役人たちは、足柄峠で最後の別れを告げ、荒々しい東国へ足を踏み入れる感慨をかみしめたことでしょう。また、地方から遠く九州へ防人の任におもむく人たちも、この峠の頂上付近で手向けをして、山の神にお祈りし、いよいよ東国とも別れ、これから何か月にもわたるながい苦難の旅への決意をいっそう新たにしたことでしょう。

東国の人たちがよんだ歌を東歌といいますが、万葉集巻十四には、まだひらけない国々の名も知らない人たちの歌が、約二百三十首ほど収められています。

東歌はそのほとんどが恋の歌ですが、方言でうたわれたものや、今日の民謡のようなものもあり、土の生活に密着した素朴で、純真な情感が率直に表現されていて、当時のくらしの様子がよくうかがわれます。

○足柄地方の歌

鳥総立て　足柄山に船木伐り
樹に伐り行きつ　あたら船木を　（巻三の三九一）

（大意）樹の枝を立てて神を祭り、足柄山で船木として切ろうとすると、それを他の人が切っていってしまった。船材として、とても惜しい木であったのに。

足柄の　箱根飛び越え　行く鶴の
ともしき見れば　大和し思ほゆ　（巻七の一一七五）

（大意）足柄の箱根の山を飛び越えて、西の方へ飛んでいくうらやましい鶴を眺めるにつけ、大和がしのばれてならない。

足柄地方がうたわれた古い歌は、数多くありますが、これらの歌に秘められた心のひびきは、古い時代に、美しい足柄の風土に接した人びとの姿や、足柄道を通っていった旅人のさまざまな感慨を、今も私たちに静かに想わせます。